



ピッポ新聞

2004

8

No. 190

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

Email pippo@diana.dti.ne.jp

大型絵本について考えてみる

その5

拝啓 大和茂夫 様

「暖簾に腕押し」「糠に釘」。本当に張り合いが無いったらありやしない！大和さん、どうして当方の再質問に答えていただけないのでしょいか？最初の回答書の結びで、貴方はこう書いておられました「小社もよりよい方法でよりよい絵本を世に送り続けたいと願っています。今後ともどうぞさまざまなお意見をお聞かせいただけますならば幸いです」と。

これは単なる社交辞令だったということでしょうか。それを真に受けたほうがバカと言うことになるのでしょうか。しかし、都合の良い質問には回答をして、都合の悪い質問に対して黙りを決め込む態度を、これを世間では「不誠実」というのですが……。

さて、大和さんからの回答がありませんが、さいわい、福音館編集担当の取締役の田中秀治さんが「この本読んで！」2004夏号、NO.11、(P.C.発行・季刊誌)の中で大型絵本について語っていますから、今回は、これをよりどころに角度を変えて質問して、大和さんからの回答をお待ちしたいと思います。

田中さんはここで、福音館が大型絵本を出版した理由を2つあげています(ま、この2つは大

和さんの最初の回答にもありましたが)から、この2つに絞って取りあげてみます。

最初は、

大型絵本をスタートさせた理由のひとつには、保育園や幼稚園、図書館などで、集団で読みかかせをしている人たちから「自分たちで本を大きくして使ってかまわないか？」という問い合わせが増えたこと、つまり読者からニーズ(傍点筆者)があったことがおおきな理由です。

と田中さんは語り、このすぐ後に、オリジナルなイメージが壊れるから、勝手に素人が手作り大型化してもらっては困ると続くのですね。

ほくはこれに対してこう質問をしてみたいと思います。福音館の制作する大型絵本はオリジナルなイメージを壊さないと本気で考えなのですか？(素人は駄目だけれど、出版社ならイメージがこわれなないと考えているのなら、それは不遜というものだとも思います)

なお、この素人が大型絵本を手作りすることについてのほくの考えは、6月号で明らかにしています。

ここでは各方面からニーズがあったから、大型絵本の制作をしたのだという理由についてよく考えてみたいのです。

実は、ここには誤魔化しがあるような気がします。

一見すると、読者の要望に応える良心的な出版

社だと感じてしまいましたが、ここには二冊の実体というものが、全然明らかにされていません。

たまたま、ぼくは子どもの本屋なので、多くのお客さん(多くというのはあくまでも主観ですが)や、子どもの本と長い間関わっている家庭文庫や幼稚園・保育園の先生の意見を聞くことができる立場です。そこからは田中さんというような、大型絵本の二冊などほとんど聞こえてきません。ですから、田中さんや大和さんがおっしゃっている大型絵本に対する各方面の二冊なるものの理解に苦しみます。

それよりも、不思議でならないのは、7月号の「ピッポ新聞」の大型絵本について文章を書いてくれた小泉さんや川口さんのような反対意見が当然予想されるのに、このことにたいしての配慮が何処にも感じられないことです。

こういうのを我田引水というのではありませんか。

そこで、この二人の意見に対しての感想をお聞かせいただければ幸いです。

なぜこんなことにごだわるのかといえば、大型絵本は、明らかにこれまでの福音館書店の路線とは違つと考えるからです。

話がちょっと逸れるかも知れませんが、

福音館書店の元社長の松居直さんと、元編集部長の斎藤惇夫さんは現在も全国で

「子どもの本」について講演(熱く語る様子を、これまでに何度か拝聴いたしました)を盛んにしています。その話の内容に多くの人はうなずいています。

しかし、お二人の話をどう拡大解釈したとしても、あるいはどう発展させたとしても、ぼくはそこから大型絵本制作に結びつけることは出来ません。それどころか、反対の結論に至らざるを得ません。

何故なのかと言えば、これは明らかに二人の話の内容と現在の福音館の路線が違っているからではないでしょうか?

そうであるならば、松居さんや斎藤さんは、福音館に対する幻想を全国に振りまいていることになりませんか。このことについてもお答え願えれば幸いです。

さて、次に大和さんも田中さんも「弱視者のため」ということを絵本の大型化の理由としてあげていらっしゃいます。

ぼくもこのことに異論はありません。むしろ出版社の姿勢として、そういう要望に積極的に応えることには大歓迎です。

しかし、田中さんのように公の雑誌で、いかにも福音館は障害者のために役立つとまずと、「弱視者のため」を声高に叫ぶことはいかなるものでしょうか? こういう姿勢は、企業としての品位を疑がわれると思えます。

例えば、新潟や福井の水害被災地にボランティアで出かける人が「おれは被災者のために出かけるぞ!」などと声高に叫んで

ボランティアに出かける人がいるのでしょうか? また、良く目にするのですが、公共図書館などに「xx企業寄贈」などというプレートが嵌っている棚があります。ぼくはそんなのを見ると、わざわざその企業はお金を使って恥をかいているのだと思つてしまいます。

声高に「弱視者のため」とさげぶのはこれと同じことだと思えます。謙虚さがありません。どうせやるのなら、企業メセナとして(黙つてしかも無料で)おやりになつたらいかがでしょうか。

錦の御旗のように「弱視者のため」などと声高にさげぶれると、福音館書店のイメージが壊れてしまいませんか? それに「のため」などと自分からいう出版に、良い本などあったためしがありませんもの。

さて、最後になりましたが、実はこの間、住所がわかった6人の作者の方にピッポ新聞と手紙を添えて、大型絵本を出した理由をお尋ねいたしました。

その中のお2人の方は、即日お返事をくださりましたが、あとの4人の方には無視されてしまいました。

その内のお1人は「その理由を忘れてしまった」との回答でしたが、その内容はとても暖かく、ぼくには周囲の方に配慮したご返事だと受け取れました。

後1人の方は、作者としての希望は初版(こどものともの版型)の形で読んでもらうことで、小さい子なら両親の膝の上で、

幼稚園や保育園では先生にくつついて、お友だちと肩を寄せ合っていていっしょに楽しんでほしいということ。大型にしたのは弱視の子どものためとはつきりとお答えくださいました。理由はボランティアグループから拡大許可の依頼があったが、しかし、素人の手描きではと考えた結果だと言うこととです。

田中さん、この作者のおっしゃっていることと、田中さんが雑誌で、作者の方はとても喜んでいて、述べていることには大きな開きがあると思いますが、いかがでしょうか？

と、ここまで書いたところ(7月30日の時点)で、タイミングが良いというのか悪いというのか、福音館の販売の小倉部長さんから電話がありました。「再質問に対して、お答えしなければならぬのですが、一度ピッポへ出向いてお答えしたい」というのです。

突然の電話だったので、ちょっと戸惑いました。ワザワザ出向いて説明してもらうことでもありませんし、第一、ぼくは大和編集部長に対して公開で質問をしているのだし、書面で回答をいただきたい由を申しましたら、来週、福音館としての回答を送付下さるということでした。対応していただけることがわかり、とても喜んでいました。

ですから、9月号のピッポ新聞に福音館の回答を載せることが出来ると思います。

今月はこのまま発行いたします事をご承知おき下さい。

山里からの便り

佐久間雅哉

六月はじめ、十八年間飼っていた犬の「ギン」が死にました。ここへ引越してすぐもらった雑種犬です。

リヤカー550キロの旅にも連れていったし、よく走る犬で、田圃の水見、子ども保育園の送り迎えも、車の後を元気に付いてきたものでした。足腰が強かったのはリヤカーの旅のせいかもしれません。

生涯犬小屋には入らず、縁の下か作業台の下に寝る癖がついたからでしょう。私の山里での子育ての時期をともしした犬でした。

十八年！あらためて振り返ればいろいろありますが、しもたがおれ下高下部落は相変わらず過疎のまま、さらに深刻さをまじてきました。

既に二十五人の方が亡くなり、三十あった戸数は二十二に減って、その内八軒は一人暮らしの老人世帯です。六十歳以下の世帯主は私を含めて三人。子どもは小学六年の女の子と、うちの高一の茅だけです。

田圃の作付け面積は年々減り、共同作業も支障をきたしております。

穂積地区全体も陰りを見せて、小学校は二十二人になってしまいました。「ゆず祭」「あじさい祭」や、空家対策事業と、いろいろ

いる地域おこしをやってきましたが、もう一地域だけの努力も限界です。

たしかに保守的で横並び主義の地域ではあります。でもそうだった歴史的背景を知れば当然とも思えます。

私がこの山里に魅了されたのは、その歴史的背景そのもので、自然と人間の関わりを歴史を感じたからでした。人は自然破壊をしますが、共存しようとする能力も本能的に持っているということです。

自然と折り合いを付けたいなら、共同で行動にしないと自然にやられてしまうという認識が、社会的歴史とくつついて、今のようない地域意識がつけられたのではないかと思うのです。

もし自然から隔離された社会の人間が自然の中に放り込まれたらどうなるか？意外にしぶとく生き抜くと思うのです。生きようとする手だてを目の前にある自然の中に求めるでしょう。

生死を分けるには経験、知識、運が左右するでしょうが、本能としての野生能力は人間には備わっているということとです。

今、全国にある山の中の集落は、その良い証拠だと思ふのです。と同時に、日本はそれだけ自然が豊かな国であることの証明でもあるのです。

しもたがおれ下高下部落の過疎がくいとめられないならば、せめて、死ぬまでここにどまって、山里の暮らしを続け、何らかの方法でその良さを発信し続けたい！

おっと、ギンが死んだせいかな、ちょっとセンチメンタルになってしまいました。

ねー、この本読んだ？

『うろこだま』 (長谷川摂子・文 下田昌克・絵 798円 岩波書店)



これは「てのひらむかしばなし」のシリーズとして出された中の1冊。このシリーズは今回ほかに『ももたろう』『(はたこうしろう・絵)』『かちかちやま』『(ささめやゆき・絵)』『したきりすずめ』(ましませつこ・絵)の計4冊が同時発売されましたが、文はいずれも長谷川摂子さんです。いずれもリスミカルな文と、会話の部分は親しみがもてる方言で語られていますから、お話をおぼえて、子どもに語ってやっても喜ばれると思います。



『なつのいちいち』 (はたこうしろう・作 1050円 偕成社)
この絵本について作者は言っています。このほんは文章は少ししかありません。でも、絵と物語をゆっくり追うことで、それぞれの人

が知っている「夏の音」や「夏の匂い」、「夏の空気」を感じてもらえたらいいと思います。そうです！これは自分の体験によってさまざまに広がる絵本です。

『赤いカヌーにのって』 (ベラ・B・ウジリアムズ・作 斎藤倫子・訳 1365円 あすなる書房)



2人の子がいとこどうしというから、お母さんたちは姉妹かな？中古の赤いカヌーを買って、4人は3日間のカヌーの旅に出かけます。川を下る途中では、ヘラジカに出会ったり、露営中に嵐にもあつたりとなかなかの冒険の川下りでした。一部野外料理やロープの結び方など実用的な面も描かれていて、この2人のお母さんは若い時にはアウトドアのなかなかの経験者であることが分かります。



『知らざあ言つて聞かせやしよう』 (河竹黙阿弥・文 飯野和好・絵 斎藤孝・編 1260円 ほるぷ出版)
「おつと合点承知の助」「えんにち 奇想天外」

に続く、声に出すことばえほんの3作目。これはご存知、白浪五人男の一人、弁天小僧菊之助の名台詞。飯野和好さんの絵が、とてもこの台詞の内容を理解するのにわかりやすいです。

『アリからみると』 (桑原隆一・文 栗林慧・写真 880円 福音館書店)



わたしたちは人間ですから普段見ている物は人間の目で見える大きさや形を無意識に見ているわけですね。ところで、もしも、アリから見たら周りがどのように映っているのかを写真で表したのがこの絵本です。バッタなどの昆虫は巨大な怪物に、雑草などの茂みは、巨大なジャングルというわけです。

インフォメーション



上の写真のものは「レンズスポットク」といいます。はこの上には2倍と4倍のレンズがついています。中に「ダンゴムシ」などを入れて観察すると面白いです。

ドイツ製 683円

今月の「お話会」はお休みします